
アリアドール

ナナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリアドール

【Nコード】

N8010Z

【作者名】

ナナツ

【あらすじ】

レイストロ歴699年。それは運命の年。世界が生まれ変わる時。神・色彩の女王によって絶対の平和を約束された世界レイストロ。現存し、城に住まう女王はある未来を預言した。それは終わりと誕生。

死にゆく女王。女王に狂う軍人。世界を知る魔女。そして新しき女王。

それぞれの想いが巡る中、新しい世界は生まれる。

女王と世界が交わるファンタジー物語。

青い木々をすり抜け、するりと小さな体を走らせる。息を切らしながら進むその先で突如、景色が開けた。飲み込まれてしまいそうな濃密な花の香り。とろりとした桃色の空気が少年の体をすっぽり包み込んだ。彼は思わず唸ったが次の瞬間、そんなことはどうでもよくなった。

秘密の花園に佇むその姿は、よく出来過ぎた絵画のようであった。

薄いまぶたを閉ざし、手を胸の前に合わせる。祈りの儀式に違いないだろうが、彼にはもつと別の行為に見えた。だがまだ幼い胸は浮かんだ思いを形にできなかった。しかしそれが美しいものだということ、体が震えるほどわかった。

日に透ける薄い金色の髪は波打ちながら長く垂れ、華奢な体を覆いつくしている。よくよく見ればその顔はあどけなく、少女の色が残っていた。薄桃の頬とくちびるがふつくらと艶めき、そしてまぶたをゆつくりと開けた。

緑の光彩。姿は少女だが瞳に宿るのは時代を生き抜いた疲弊の色。幼さ残る顔立ちに似合わない疲れが染みこんでいた。

少年はたまらず声をかけた。何も考えていなかった。

「ねえ、何してるの？」

少女は自分より幼い童子を見ると、突如現れた訪問者に驚く風はまるでなく、ふつくりと口元に笑みを浮かべた。花のような微笑は

幼い心を惑わし、言葉を奪ってしまった。何も言えなくなってしまった少年を見て少女はさらに微笑んだ。

「あなたは祈る時、誰にその姿を捧げますか？」

祈る、という表現がぴんとこないでいた。それは少年が祈ったことがないせいもあるが、それ以上にこの世界に祈るようなものがない、と少年は考えている。祈ってあげたい存在も、祈るような内容もない。さらにそれを捧げるだなんて、意味が不明にもほどがあった。色彩の世界レイストロは色彩の女王という神が守っている。誰もが女王を崇めていたが、少年は幼さゆえにまだ祈ることができないでいた。

少年は深く思索し、なぜなぞでも解くような気持ちになりながらも再び口を開いた。

「お母さんかな」

「なぜ？」

「おやつを買ってくれるから」

真面目に答えたつもりだ。現に、少年はここに訪れる前におやつを食べている。食べたいとせがんでせがんで、ようやく買ってもらったものだ。代わりに今日の夕飯のおかずが一品減るが今は気にならない。後になってわめくだろうけど。

聞く人が聞けば怒ってしまうかもしれないだろう回答に、少女は小さな笑い声を漏らした。まるでガラスの花が咲くように、くしゃり、と儚げな音をたてて。

それはあまりに悲しい光景だった。黄昏時の、どろりと冷たい寂

しさに似ている。今日が終わる虚しさ、夜が訪れる気配、しんと静まる夜更け。少女はとても可憐なのに、どこまでも影が濃く付きまとう。こんなにも美しい姿なのになぜそんなものが見えてしまうのか、少年は肌で感じるだけで理解はできなかった。

「お姉さんは誰に祈っていたの？お願い事があるの」

少女はほんの少しだけ眉を下げると、吟味するようにまぶたを降ろした。

「私もわからないの。誰にお願いをしているのか。でも願ったところで無理なの。ただ時間をすごすことだけが、唯一だから……」
「諦めたらだめだよ」

少年は反射的に言ってしまった。自分でも思ってもみない言葉だったので驚いたが、少女はきょとんとした後、再びふつくと笑って少年に熱いまなざしを送った。

「ありがとう、小さなお客さん」

「お姉さんのお願い、叶うよ。もし祈りが届かなかったら、僕が代わりに叶えてあげる。これでも強いから」

少女は口元に指を沿え、心底嬉しそうに綻んで大きな笑い声まであげた。変なことを言ったつもりはないが、少女が喜んでくれるならそれでいい、と少年も笑った。

「そろそろ行かなくちゃ」

「待って、お客さん」

振り向くと、少女は頬を紅潮させ、まるでこの世の終わりのよう

な笑顔で少年を見つめた。思わず少年の胸が高鳴り、視野に少女しか入らない。他に何もなく、今この瞬間に少年の眼は少女に全て奪われた。

しかし少女は少年を見ていないようだった。その熱い眼差しは誰に向けているのだろうか。確かにこちらを向いているはずなのに、かち合わない。だが少年の思考回路にそれを考えるゆとりはない。ただただ少女を見つめるほかなかった。

「遠くて近い未来。私はあなたに何も言えず死ぬのでしょうか。だから今、言わせてください」

少女はためらいがちにくちびるを開くと、両手を合わせて祈りまぶたを閉じた。

「私は、あなたを愛してます」

とても小さく儚い声だったが、少年の耳にはつきりと届いた。この時、少年は初めて愛するという言葉を知った。血縁の者ではなく、他人の口からこぼれた声は少年を困惑させるには十分であった。少女の持つ愛の意味は明らかに家族の愛情を越えていた。

そうして驚いている間に少女から熱意はさざ波のように引いてた。結局、少女は誰に向かって言ったか少年はわからなかった。

「気をつけて。その垣根を抜ければ元の道に戻れますよ」
「わかった。ありがとう……」

少年は戸惑いを隠せないまま、急いで背を向けて走りだした。また会おうね、さようなら、とは言わなかった。無意識のうちに気づ

いていたのかもしれない。この少女に再び会えることを。そして少女の最後を看取り、ただ一人で泣くことを。狂人に成り果てることを。

しかしそれは予感ではなく、確実に訪れる未来だ。確実に訪れる真実。

少女は少年の背を目で追いながら祈りを捧げた。瞳から真珠の涙が零れ落ちた。白い頬をなぞり、顎を伝って花びらに落ちる。金色の髪が風もなく揺れ、緑の瞳はいつまでも少年の背を見つめていた。

「ごめんなさい……」

少女に許された行為は、音もなく泣くことだけであつた。少しでも少年が幸せであるようにと、祈ることだけであつた。

桃色の花びらが舞い散る。無残にも風に飛ばされ、甘い芳香と共に空へ消え去る。

「私は愚かでしょうか」

少女は遠く、少年が消えた方向を見つめた。小さな姿はもちろんだが少女はいつまでも見ていたい衝動に駆られていた。まだ不幸も幸も知らない無垢な魂を、見ていたかった。できることならいつまでもそうであってほしいと願いたかった。

それは願わないことだと知っていながらも、少年の笑みが永遠であることを願った。

湿った夜の匂いが近づく。今日も一日が終わろうとしている。な

のに明日を想像することができない。明日はすでに見えた映像であり、何の感慨もない。ただあるだけ。そこに存在しているだけだ。

ティアレーゼ・アリア・レイストロ。少女に見えるその姿は世界の神であり、色彩の女王。世界を保つ色を解き放ち、永遠の平和をもたらす現存する神。この世に唯一立つことが許された神、そのものだ。それは同時に人ではない呪いを少女に与えた。時代に取り残される。姿も、声も、名前すら。どこかへと置き去りにしていくような悲しさが、ただ胸に広がっていた。

レイストロ暦670年。女王が死ぬおよそ三十年前の出来事であった。

赤い花を踏みつけるように長身の軍人が足早に駆け抜ける。気迫の溢れる体に皆、気圧される形で退き、見ることも恐ろしいとばかりにそくささと反対方向へ逃げる。彼はそのことに気づいていないのか、さらに覇気を高め目的の場所へと突き進んだ。

あまりの力に絨毯から埃が舞う。軍人は腹立たしげに眉間にしわを刻み、舌を打った。覇気と相まって、それはすでに殺意と化していた。

クリストバル・レバノンがラスティカ城に勤めるようになってから早くも十五年の月日が経っていた。軍人学校に入れる最低年齢十五歳になったその日に彼は入学し、剣術を主にありとあらゆる戦術と世界史について徹底的に体と頭へ詰め込んだ。本来なら三年で卒業するところを本人の意思でその後六年在学したのだが、その理由は誰も知らず、彼は若い学生たちの熱気にまみれながらめきめきと頭角を現していった。その努力と積み重ねが在学中にも関わらず城の目に留まり、卒業後まもなく二十三歳の若さで少尉の地位を得たのは、やはり学生の頃より城に何度も足を運び各大佐の指南を受けていたからに違いない。それをよしと思わない同僚たちに疎まれることはあったが、寸分も狂わない軌道を描く剣術を見てしまっただけは何も言えず、どこか王の風格を背負う堂々たる出で立ちに、今では誰も不平を言わなくなった。三十歳で大佐まで上り詰めた彼はひっそりと「赤鬼」と呼ばれるようになるのだが、生真面目なクリストバルがそれを耳にすることは城に勤める数十年、聞くことはなかったという。

そして今、彼は守護者ガーディアンと呼ばれる地位にいた。城で

守護を意味することはただ一つ。

この世に絶対の安寧と輝かしい未来のようにきらめく色を紡ぎだす神、色彩の女王を守ることを意味する。この世に君臨せし現存する神。人と同じように呼吸をし、会話をし、食事をし、共に暮らす。寸分狂わず「人」の外見であるにも関わらず女王は神である。崇め、守護すべきその存在の姿は神々しいかと言われればそれは違っていた。なにせその姿は少女なのだから。

クリストバルは足を止めると大きく伸びる扉の真正面に立った。蛇の鱗に絡みつく鳶、瘦躯の剣の文様はラステイカと世界を繋ぐ神話だと言われている。蛇の尾がある部分をノックすると柔らかい声が返ってきた。飴細工のように細くのんびりとした声色にクリストバルのベリルの瞳が収縮する。クリストバルは咳払い一つすると扉を開け、目を細めた。

「ああ、クリストバル。ご苦労様です」

眩い光を一身に受け、少女が振り返った。その姿はまさしく少女だ。まだ十代半ばか後半に差ししかかったぐらいであろう、まだあどけなさの残る華奢な線。たつぷりとたなびく黄金の髪が日差しととろけあうように輝いている。部屋も少女のためにあつらえた繊細な家具ばかりで、まるでドールハウスに吸い込まれたような眩暈と錯覚が生まれる。だがクリストバルが倒れることはなく、むしろ覇気を強め少女を見つめた。

「女王様。お時間です」

ガーディアンの仕事は様々だ。女王に関する全てを任される。時間を告げ、堂々と部屋に入れるのはガーディアン……ではなく、ク

リストバルただ一人。そして守るべき相手はこの少女に違いなかった。少女女王は柔らかく微笑むと手にしているバラを白い花瓶に生けるとリストバルをうんと見上げた。鍛え抜かれた体は日差しをも遮る。放たれる威圧感は一瞬だけではなく体自体も物語っていた。

「預言式典の準備を御願います」

誰もが逃げる赤鬼の低い声に女王は少しも動じず、両手を背中の後ろへ隠した。

「ねえねえ、リストバル。その前に問題。どっちの手がいい？」

「女王様。今はそのような事をしている場合ではございません」

「これも式典のためなの。ね？お願い」

甘える声にさすがのリストバルも敵わないらしく、少しだけ眉間を解いて女王を見つめた。本来ならぶしつけとされる正面からの視線も、リストバルは許されていた。

幼い子どものように少女はじつとリストバルを待っている。彼は少しため息混じりに「右」とつぶやいた。すると女王は威厳がまるでない、まっさらな笑みを満面に浮かべた。バラの芳香が鼻をくすぐる。

「あなたならこっちを選んでくれると思った」

右手がそつと差し出される。そこにあるのは淡く輝くパールブローチだった。銀色のレース細工が施された、華奢だが真ん中にはめ込まれたパールのおかげで淑女の重みが見える。女王はそれを胸に付けると髪をかきあげた。

「どう？似合いますか」

「あなたにはまだ早いかと思います」

「もう、クリストバル。私をいくつだと思っているんですか？見た目こそまだ十八ですが、これでもあなたより随分と長く生きているですよ」

「わかっていますよ、色彩の女王様」

「そうやって子ども扱いするんだから……」

女王は頬を膨らみながらブローチをつついた。そんな仕草一つ一つが子どもに見せていると、本人は気づいているだろうか。

「あ、クリストバル。笑ってる」

クリストバルは急いで口元を覆った。だが時すでに遅し、女王は嬉しそうにクリストバルをじいっと眺め、覗き込んでいる。一見すれば、子どもに翻弄される父親のようにしか見えない。女王はくすくすと笑いながらドレスを翻した。淡いピンクのシフォンが舞う。

「一年つてあつという間ね。長く生きてると一年の短さが年々感じるわ」

「本日の予定ですが、例年通りバルコニーから演説を行い、一年の預言を発言していただきます。式典に参加できない者たちについては書類を送ることにしました」

「そうね。それがいいわ。目に見えない人たちも色彩の民。この世界に必要な人たちです。それに、来年は少し日照りが多いので農家の人たちは大変になるでしょうから、そちらの方に力を入れてもらいましょう。そんなに続かないからみんなが倒れることはありません」

女王はバラの花瓶を持つと日当たりのよいテーブルへ向かった。

クリストバルは女王の背を見つめる。

「クリストバル。あなた、何か怒っていたわね。どうしてですか？」

クリストバルの胸がどきりと疼く。だが表面には出さず、鉄壁は崩れなかった。それでも女王に隠し事は無駄なことだ。

色彩の女王。この世を平和に導く、現存する神。目の前にいる少女は少女であり、女王そのものだった。なぜ神と呼ばれるか？ただの少女に見えるそれに何が内包されているのか？ガーディアンであるクリストバルは全てを知っていた。誰もが逃げてしまう中、クリストバルだけがここにこうして立っている。

「女王様なら全とお見通しでしょう」

「あなたの口から聞きたいのです。私が見ている未来は常にここにはない。現在は今しかないんですよ」

「あなたは意地悪ですね」

「あなたが真面目なだけよ」

女王は振り返るとろけた笑みを浮かべた。バラの花びらが細かい音を立てて揺れる。

少女にしか見えない彼女は孤独だという事をクリストバルは知っていた。色彩の女王がどれほどのものかを実感できなくとも、孤独だということだけは理解できた。女王はこうして微笑むが、最初は悲しんでばかりの哀れな娘だった。それがこうして微笑むようになったのはいつからだろうか。数年、数十年経った今でも少女のままにいる女王。この少女が微笑んでいられるためにクリストバルはここにいて、ここにいたいと願っている。

その声を通じたように、女王は頬を赤らめた。　そう、クリストバルの心の声は確実に女王の耳に響いているのだ。それが色彩の女王。人々の声を聞き、平和に導く存在。

「あなたは本当に真面目ですね。……今年も手紙が」

「はい。魔女を名乗る者からの手紙が今年も。内容は同じです」

「女王は人ではない。神でもない。哀れな娘が呪われた姿に過ぎない。それを崇める色彩の民よ、目を覚ませ。……でしたね」

女王の顔が少し曇ったがすぐに凜とした表情に切り替わる。幼く見えても女王は女王。年月を重ねた顔がそこにあった。

「馬鹿げた内容だ」

「いいえ、その通りです。私は人だけれど人ではない。色彩の世界を保つために行き続け、未来を見続け、人の声を聞く。現に、私はあなたより長く生きているし、あなたの声も聞こえる。この姿のまま行き続け、人の心を読むなんて不気味ですよ」

色彩の女王。それはこの世界、レイストロを守りし神。全ての色彩や命は女王が紡ぎだし、色鮮やかに世界へと降り注ぐ。女王の仕草、言葉、吐息全てに世界の息吹が含まれている。この日差しですら女王が生み、人々にぬくもりを与えている。静かなこの声ですら力となるのだ。

「姿の见えない魔女の方がよっぽど不気味です。それにあなたは神だ。それを妬んでいるだけでしょ」

女王は答えず、クリストバルの隣に並んだ。そつと顔を向け、くちびるを結んだがすぐに解けた。

「クリストバル。式典の後、またすぐに来てください。あなたにだけ伝えたいことがあります」

「了解しました」

「ベールを用意してください。それを頭に」

「それはメイドの仕事です」

「あなたにやつてもらいたいのです。たまにはいいでしょう?」

クリストバルは鼻で息をつく、クローゼットの脇にある小さな引き出しを開け、黒いベールを取り出した。それをそつと女王の頭に乗せる。白い顔と金色の髪が隠れ、少女は得たいの知れない何かと化した。

「さあ、行きましょう」

扉が開く。クリストバルは女王を促し、お互い一步を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8010z/>

アリアドール

2011年12月25日18時49分発行